

# 第11回風景デザインサロン●開催レポート

## 第11回風景デザインサロンの実施状況

去る平成20年11月19日(水)に、福岡市薬院にて、第11回風景デザインサロンを開催しました。

- 講師：木寺佐和記氏、前田秀喜氏、林真希子氏(西日本技術開発(株))
- テーマ：建設コンサルタントと景観デザイン その2  
(前原停車場線景観整備プロジェクトで学んだこととその後)
- 開催時間・場所：18:30~21:00 / I CONE(福岡市薬院)
- 参加人数：16名

本年度第5回目のサロンでは、木寺氏、前田氏、林氏が携わってこられた前原停車場線景観整備プロジェクトの概要を紹介していただき、同プロジェクトの模型活用の効果と課題、コンサルタントの役割などについてお話して頂きました。

## 講演内容の骨子

### 1. 前原停車場線景観整備プロジェクトの概要

本プロジェクトは、平成16年度の前原停車場線約260m区間の道路拡幅と電線類地中化工事実施に向けて「前原停車場線まちなみ懇談会」を設置し、学識経験者のアドバイスを得ながら、住民参加で道づくりの方向性、具体的な設計について検討をおこなったものである。本プロジェクトの特徴は、2名の学識経験者の指導の下で、模型を活用し、住民とともに多くの検討をおこなったことにある。

2名の学識経験者は、「建築」と「土木」という分野の違いがあったため、議論が分かれることもあったが、最終的には全体の方向性を樋口准教授(土木)が、詳細デザインを松岡恭子氏(建築)が中心となって指導をおこなうこととなった。懇談会のメンバーについては、平成14年度の前原停車場線の目標像について意見交換をおこなっていたときには、まだ地権者が入っておらず、行政区長など興味を持つ積極的な住民が大半で、話し合いもスムーズであった。平成15年度の懇談会では、沿道及び周辺の住民の参加拡大のため、メンバーに地権者を加えた。すると、当初参加住民は前原市の広い範囲から、と考えていた懇談会が最後は地権者中心になり、「みんなの道」のはずが、家の前は自分の思い通りにすべきという雰囲気なり、意見調整の場になってしまった。

検討内容が具体的になるにつれ、デザインをどこまで市民参加でおこなうか、ということも課題となったが、懇談会を進める中で、雰囲気やイメージの理解は住民とおこない、詳細はコンサルタントに任せられる流れとなった。完成した道路は施工管理が不十分であるなどの課題もあるが、道路沿いに花のプランターが飾られるなど完成後に住民の愛着の醸造が見られたことは住民参加の成果であった。



現在の前原停車場線の風景

### 2. 懇談会における模型活用の効果と課題

懇談会の検討の際には模型を活用した。はじめは、100分の1模型や図面を使用した。スケールが大きすぎる、よく見えないという意見が住民から出たため、それ以降は40分の1模型で、車の乗り入れ位置、高木植栽、地上機器、縁石、信号機など詳細の検討を進めていった。

模型による検討は、前回の会議で出した住民の意見が、次の会では模型に反映されているという形で進めていった。これは、参加住民の意欲向上につながり、個人の意見が景観にどう影響するのかもわかりやすく伝わるようになった。具体的なイメージが沸くため活発な議論が実現し、目の前にある共通のイメージで議論ができるという効果もあった。実際に、沿道の地権者は自然と自分の家、土地の周りに座るようになり、高木などの位置を自分で動かしたりする人もいた。また、本来であれば行政などが各家庭を回って確認する事項を懇談会の場で確認でき、声の大きい人の意見でなく合意で決めることができたことも効果としてあげられる。課題としては、具体的なイメージがわかりやすいため、本当に議論したい全体景観でなく乗り入れ位置など各戸の利害に関わる部分に意見が集中してしまった。目的に応じて製作内容を工夫しなければならない。ほかに、模型作成・運搬・組み立てなどの労力・コストの問題、模型の縮尺と設置スペース、質感・色などの表現の限界、などがある。質感や色彩については別途、材料見本の提示や現地実験の実施で対応した。



40分の1模型による検討の様子

### 3. 懇談会でのコンサルタントの役割

コンサルタントとしては、懇談会の進め方を事前に事務局で十分に検討し資料作成をおこなった。毎回議事録をメンバー全員に送付し、成果の周知を図り、住民からの問い合わせにも対応した。また、土木に関わる基準や、デザインしたいものに関わる選択肢など、デザインにあたって必要となる情報を提供した。特に土木事務所とデザイナーとの間で、コスト面の配慮などに注力した。詳細設計は、松岡恭子氏とともに細部まで検討を重ねながらおこなった。

## 質疑応答

木寺氏の熱心なご講演の後、質疑応答の時間を設けて意見交換をしました。今回は少人数での開催ということもあり、ひとつひとつの質問に対し議論が起こる、充実した質疑応答の時間となりました。質疑応答の中で会場から出た意見も発言者（会場）として加えています。

主な質疑応答は以下のとおりです。

- 1) (質問) 地権者をメンバーに加えることで地権者の道づくりとなっていく一方で、沿道の住民の愛着が醸造されたという話があったが、地域の代表者による大きな視点での道づくりと地権者のみでの道づくりとどちらがよかったと思うか？  
(回答) 地権者の声を聞いたことは意味があった。地権者の中には地元に関係のない人もいたので、地権者であるかないかでなく、地元住民に意見を聞く、というのが重要ではないかと思う。
- 2) (質問) 景観に配慮した道路を提案してもあまり受け入れられない。発注者にどう説得すればよいか？また、一般道路と景観に考慮した道路とではコスト差はどれくらいあるのか？  
(回答) コストは必ずしもあがらないが、前原の道路の場合、材料にお金がかかる部分もあった。基準で可能な範囲で決めた。今は特注でなくてもデザインのバリエーションもある。県で認められたのは住民を入れたプロジェクトの盛り上がりがあったためである。ただ住民が大事だというだけでなく、使い方の提案や発言力を持った人の意見などをうまく引き出す作戦を考えるべきではないか。  
(会場) 景観配慮によるコストは河川や橋梁など骨格を変えるものでは必ずしも高くはないが、道の場合はファニチャーなど附属物のグレードアップはコストがどうしてもかかる。補助金の仕組みを活用して予算自体をあげないとデザインの向上には限界があると思う。
- 3) (質問) 100分の1模型はどのように使われていたか？全体イメージの共有が課題にあったが、スケールの違いによる議論の内容の違いを教えてください。  
(回答) はじめは100分の1だけで済ませるつもりだったが、全体把握とディテールのため40分の1にした。全体が明らかになったのは40分の1模型にしてからだった。  
(会場) 40分の1にすると、いい意味では具体的イメージが沸くが、一方、具体的にわかってしまって、話したくないことが話題にされてしまったのではないか。  
(会場) はじめに全体イメージの要望をまず聞く必要があるのではないか。  
(回答) 議論内容によってうまく模型を使い分けることが必要なのだろうと思う。
- 4) (質問) コンサルタントとして景観デザイン一番主張したことは？  
(回答) 受注者としてのコンサルタントの責任は「二人の学識経験者が好きなように、最後まで熱を入れてやってほしい。二人の力や経験をプロジェクトの中で十二分に発揮してもらいたい。それをどう支えるか」ということであった。
- 5) (質問) あとに模型を使った事例はあるか？前原の模型はどこで作ったのか？外注か？  
(回答) 機会があれば使いたいと思っているが機会は多くはない。しかし、プロポーザルでは経験や方法の提案は有利になる。前原の模型は内部で作った。最終形ではないスタディ模型で外注する必要はない。もともと模型を作成する予算は見られていないためシステムの構築が必要である。
- 6) (質問) 制度が整った場合に、コンサルタントで模型製作をおこないたいと思うか？  
(回答) 現在は、学生からの経験者が出てきて、バイトと一緒にやってくれるようになってきている。しかし、スペースがない。会議室兼模型スタディの部屋があればいいと思う。
- 7) (質問) 景観検討をおこなえることはプロポーザルにおいて有利になるか？  
(回答) 九州地方整備局も公募制になり、実績で応募することになっているので「住民参加」と「模型」はアピールになっている。
- 8) (質問) プロジェクトの中で地域のコミュニティを生むためにはどうしたらいいか？  
(回答) 道のネーミングや祭の場所にする、などの提案があった。自発的におこなわれた沿道のプラントーも話し合いで作られた雰囲気の結果といえるのではないか。
- 9) (質問) 業務としての費用対効果はあったか？  
(回答) 模型やファニチャー、謝金などにお金がかかり、県が出せるお金が限定されているため、少し赤字になった。しかし、社内では長期的に見れば良いプロジェクトとしてクレームはなかった。
- 10) (質問) 採算性の問題もあるが、建コンのような活動もあることを考えれば、コンサルタントが地域づくりに入っていくべきか。  
(回答) お金儲けのベースとしてやるのは不可能だが、一般業務だけしていてもプロボはとれない。採算性だけで仕事を選ぶのではなく、節目で力を入れてする仕事はのちに生きるものでやるべきだと思う。
- 11) (質問) 住民には「地権者」と「周辺住民」と「一般住民」がいるが、検討の際に3つの住民の参加の仕方について理想的なパターンはどのようなパターンか？  
(会場) 街路の景観では周辺の建物が重要だと思う。地権者、周辺の住民といった結果的に景観を作る人の意思統一が必要ではないか。  
(会場) 住民の議論が発散するのを地権者の意見で収束させることができる、という考え方もある。  
(回答) 事実、地権者が参加してから、地権者の意見が強くなって、地権者以外の意見をよく言う人は遠のいてしまった。バランスを取るのは事務局の役目だろう。  
(会場) 住民の結束は大事だがエゴ集団になってはいけぬ。外からの意見はパワーがなく、内にどれだけ全体的な視野を持った人がいるかではないか。  
(会場) 住民の意見を聞くためには「多くの人の参加」が必要であり、同時に「地域の権力構造の把握」が必要である。それとは別に、形にするために「デザイナーがいること」が必要である。参加してもらうことで愛着は生まれるのでプロセスの中に住民がいることは重要だと思う。  
(会場) ある程度からデザインの検討を専門家側で引き受けるためには、今回の事例のように、住民が専門家に対して「この会社（人）ならまかせよう」と感じてくれるかが大事だと思う。プロセスにおける誠実な対応の結果として信頼が得られるのだと思う。